様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３７７３

研究課題名（和文）企業家の省察についての二人称的アプローチとその有用性の検討

研究課題名（英文）The second-person approach to entrepreneurial reflection and examination of its relevance

研究代表者
伊藤　智明（Ito, Chiaki）

京都大学・経営管理研究部・特定講師

研究者番号：３０８１２１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、企業家の語りに着目した質的方法として、起業と経営についての二人称的アプローチの有用性を検討することにある。この目的を達成するために、以下の3点を行った。第1に、一人の連続起業家との対話を繰り返すこととその対話の逐語記録を作成することである。第2に、蓄積された対話の逐語記録から起業と経営についてのプロセスのモデルを生成することである。第3に、プロセスのモデルが生成された文脈として、起業家と研究者との関わり合いのプロセスを記述することである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義や社会的意義として、以下の3点を挙げる。第1に、創業期のベンチャー企業における創業経営者と組織の関わり合いという研究主題への着眼である。第2に、経営学的なアクション・リサーチを行なうためのフィールドとして、創業期のベンチャー企業の創業経営者との対話空間を設定したことである。第3に、企業家の省察に着目し、実務と研究のどちらにも有用な知見を生み出そうとしていることである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the utility of a second-person approach to entrepreneurship and management as a qualitative method focusing on the entrepreneur's narrative. To achieve this objective, we did the following three things: 1. Repeat the dialogue with one serial entrepreneur and create a verbatim record of the dialogue. 2. To generate a model of the process of entrepreneurship and management from the verbatim record of the accumulated dialogue. 3. To describe the process of engagement between the entrepreneur and the researcher as the context in which the model of the process generate.

研究分野：経営学

キーワード：アントレプレナーシップ　二人称的アプローチ　語りの共同生成　省察　語り直し　苦悩　失敗　パートナーシップ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

経営学分野の研究、特に、組織や戦略に関する既存研究の多くは、組織の意思決定とその結果の間にある因果関係や因果メカニズムを明らかにしてきた (e.g. Simon, 1947; 三品, 2007; 沼上, 2009)。ここでの意思決定とその結果に着目するという基本的な分析枠組みは、組織や戦略の研究だけでなく、創業期のベンチャー企業での企業家活動を分析する場合にも用いられている (e.g. Sarasvathy, 2008; 江島, 2014; 山田, 2015)。経営学分野で広く用いられている、この分析枠組みは、発達心理学者のヴァスデヴィ・レディの分類によれば、対象を非関与的に観察し、理論、法則、論理を提示する三人称的アプローチと呼ばれる (Reddy, 2008)。

Reddy (2008) はまた、三人称的アプローチに対比させて、情感込みで応答的に対象と関わり合う二人称的アプローチを重視する。二人称的アプローチを用いた上で自らの関心ある側面の理論モデルを構築することは (やまだ, 1987)、経営学分野であれば、実務家と関与しながら、現実の組織の問題を解決していくアクション・リサーチの実施 (伊藤, 2018) や、実務と研究という 2 つの異なる実践を接続していく活動 (i.e. 産学連携) に資する。また、二人称的アプローチの立場で調査しなければ、創業期のベンチャー企業で企業家活動を遂行していく中での企業家の省察、特に、事業の失敗などの経験を契機とした自らのものの見方を省察する、批判的省察 (critical reflection) の過程と成果を創業経営者の視点（founder's point of view）で捉えることは困難である (伊藤・足代・山田・江島, 2016)。

経営学分野での二人称的アプローチの導入は本格的に進んでおらず、このアプローチの有用性を学術的に十分に示せているとは言い難い状況にある。この原因として、以下の 3 点が挙げられる。第 1 に、二人称的アプローチを採用した学術的価値のある研究成果が十分に蓄積されていないことである。第 2 に、二人称的アプローチに関する経営学研究における方法論的検討がなされていないことである。第 3 に、二人称的アプローチのための調査や分析の手法が開発されていないことである。

２．研究の目的

本研究の目的は、企業家の語りに着目した質的方法として、起業と経営についての二人称的アプローチの有用性を検討することにある。この目的を達成するために、以下の 3 点を行った。第 1 に、一人の連続起業家との対話を繰り返すこととその対話の逐語記録を作成することである。第 2 に、蓄積された対話の逐語記録から起業と経営についてのプロセスのモデルを生成することである。第 3 に、プロセスのモデルが生成された文脈として、起業家と研究者との関わり合いのプロセスを記述することである。

３．研究の方法

① アクション・リサーチの方法論に基づくインタビュー、対話、参与観察

アクション・リサーチの方法論でインタビュー、対話、参与観察を行なう、調査プロジェクトである。主要な調査対象は、SOUSEI 株式会社の創業経営者であり、現在は株式会社 SOUSEI Technology (以下、SOUSEI テック) の代表取締役の乃村一政氏である。創業期のベンチャー企業とその創業経営者の生態をリアルタイムで長期間、継続的に観察できることは、経営学研究にとって稀少な機会である。本調査に全面的な協力を得られており、かつ、上場というベンチャー企業にとっての節目を目指している創業経営者とベンチャー企業であることが、SOUSEI テックと乃村一政氏を調査対象に選定した理由である。調査を通じて、乃村氏の省察過程とその成果、および、ベンチャー企業である SOUSEI テックの事業や組織への影響を明らかにしていく。合わせて、乃村氏や SOUSEI テックにとって重要なステークホルダー（配偶者、取締役、出資者、

大学の共同研究者など）へのインタビュー調査を実施する。調査で得られたデータは、グラウンデッド・セオリー・アプローチやテキスト・マイニングの手法を用いて、企業家活動の動態的側面と静態的側面の両面から分析していく。分析結果に基づき、「企業家の省察の契機、内容、成果から構成される理論モデル」を構築し、創業期のベンチャー企業での企業家活動を遂行する中での創業経営者と組織とのダイナミックな関わり合いを捉えられることが、企業家の省察についての二人称的アプローチの有用性になることを示す。

② 経営学分野の方法論としての企業家の省察についての二人称的アプローチの提示

企業家の省察についての二人称的アプローチを経営学研究の方法論として位置づける、方法論研究のプロジェクトである。単一事例研究の方法論として、臨床的 (clinical) アプローチや民族誌的 (ethnographic) アプローチ、歴史的 (historical) アプローチ、物語的 (narrative) アプローチなどが経営学研究にも導入されている。これらのアプローチと関連づける形で、企業家の省察についての二人称的アプローチの位置づけを明らかにしていく。企業家活動の研究方法論を中心に文献レビューを行なった上で、企業家の省察や、創業経営者と組織の関わり合いという研究主題の特徴から、二人称的アプローチを採用する根拠を示していく。

③ 企業家の省察についての二人称的アプローチのための手法の開発

企業家の省察についての二人称的アプローチのための調査や分析の手法、および、企業家の育成プログラムを開発するプロジェクトである。本プロジェクトで想定される成果は、上記 2 つのプロジェクトの副産物である。学術的には、創業期のベンチャー企業での企業家活動のダイナミクスを明らかにするための実務家と研究者との対話記録法 (dialogue recording method) の開発に結実させる。実務的には、企業家的な省察を促すことで、創業経営者が企業家としての省察と意思決定をできるようになっていくための企業家鍛錬 (entrepreneurial deliberate practice) プログラムの開発に結実させる。

４．研究成果

査読付き学術論文としては、以下の 2 編の成果をあげることができた。

伊藤智明・福本俊樹 (2021).「起業家と研究者の関わり合い：起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共愉的な道具」『企業家研究』18, 23-40.

伊藤智明 (2022).「苦悩する連続起業家とパートナーシップ生成：二人称的アプローチに基づく省察の追跡」『経営行動科学』*33*(3), 119-141

他の業績としては、以下をあげることができた。

伊藤智明 (2021).「起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積についての現状と課題」『情報知識学会誌』*31*(4), 434-439.

以上の業績、特に伊藤・福本 (2021) は、経営学のアントレプレナーシップ研究の領域で導入され始めている二人称的アプローチの方法論的な位置づけを検討したものである。また、伊藤 (2022) は二人称的アプローチを用いた事例研究の論文になる。これらの業績は、経営実践と経営学のよりよい関係をもたらし、今後、経営学のアントレプレナーシップ研究の領域で新たな潮流を生み出す可能性がある。今後は、二人称的アプローチをもの語りアプローチとも関連づけながら、より多様な起業家の語りを検討するための方法論的な基礎づけに取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊藤 智明	４．巻 33
２．論文標題 苦悩する連続起業家とパートナーシップ生成：二人称的アプローチに基づく省察の追跡	５．発行年 2022年
３．雑誌名 経営行動科学	６．最初と最後の頁 119-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤 智明	４．巻 31
２．論文標題 起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積についての現状と課題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 情報知識学会誌	６．最初と最後の頁 434-439
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2964/jsik_2021_055	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤智明・福本俊樹	４．巻 第18号
２．論文標題 起業家と研究者の関わり合い：起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共愉的な道具	５．発行年 2021年
３．雑誌名 企業家研究	６．最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 伊藤 智明
２．発表標題 起業家と研究者との対話記録法の有用性の評価：企業で働く人びとのウェルビーイングを目指して
３．学会等名 こころの未来研究センター 人文社会科学・文理融合的研究プロジェクト 2021年度研究報告会
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤 智明
２．発表標題 起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積についての現状と課題
３．学会等名 第26回情報知識学フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤 智明
２．発表標題 起業のパートナーシップの発達：省察の履歴を追跡するための二人称的アプローチによる濃密な記述
３．学会等名 IIRサマースクール2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 Fukumoto, Toshiki & Ito, Chiaki
２．発表標題 “Mutual affection”: Exploring tactics for initiating a recurring dialogue between practitioners and researchers
３．学会等名 IIR Summer School 2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊藤智明・乃村一政・柳沢究・福本俊樹
２．発表標題 二人称的な他者との対話を語り直す起業家：建築学と経営学との協奏による時間の重ね描き」
３．学会等名 2021年度組織学会年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊藤智明
２．発表標題 起業家の語り直しの再解釈：起業家研究者からの問いかけ
３．学会等名 2021年度組織学会年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 舟津昌平・伊藤智明・椙山泰生
２．発表標題 同床異夢としてのアカデミック・エンゲージメント：ベンチャー企業の産学連携の「始まり方」について
３．学会等名 日本ベンチャー学会第23回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊藤智明
２．発表標題 連続起業家の省察の履歴とその使用法：事業の失敗からの回復と経営パートナーによる失敗の先取りに着目して
３．学会等名 経営行動科学学会経営組織部会・西日本部会共同開催シンポジウム『経営学と臨床』
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊藤智明・福本俊樹
２．発表標題 起業家と研究者との共愉的な関わり合い：起業家研究の方法としての二人称的アプローチ
３．学会等名 第9回「アントレプレナーシップ・コンファランス」
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関